

【論文】

アルベール・カミュ  
『アルジェリア通信』試論（一）

——「カビリアの悲惨」をめぐる——

佐藤和生

はじめに

1 アルベール・カミュ『アルジェリア通信』試論（一）

カミュ文学の魅力をなすものは、生え抜きの、とも言える若さ、すばしっこさであり、文章の、抑制が利いてはいるけれど、豊穡な映像と生々とした動きであり、文学者としての骨太い姿勢である。読む者は明らかにエモーショナルな高揚された瞬間と、生の思考が始動する体験とを得る。それは、確かに一流の文学がもたらす、感性の刺激と情感の充溢と思考の緊迫との一体化した、独自の生の圏内に一歩踏み込んだ者を包む、不安と悦びの体験である。そして、それは原書で読む時いっそう濃密で身近なものとなり、イマージュの奥にゆらめくものや、言語の粘っこい足取りに、自分の現在が体ごと掬われているのを感じることが、ままある。優れた絵が変わらずに生なましい油彩の輝きを放っているように、カミュの文章の流れには、不断に生きている者が、もうひとつ生を凝縮した時の、充実した脈搏がこめられている。読む者はカミュがフランス語のなかで培ってきた言葉の生理に触れることができ

る。カミュの言葉が読者にとっても生理を帯び出すと——厚ぼったい映像をもつ言葉のさまざまなカタチが浮き沈みする豊かな言葉の河が、ゆったりと、しかも軽妙に流れていることに気付く。その言葉の河は読む者の隅々までを浸して、直截に、時には紆余曲折して流れるが、彼の意識を常に冴えた状態に保ち、奔流の瞬間にも決して惑溺させるようなことはない。

思想家としてのカミュには、単色の区画をもつ哲学用語を駆使して、まだるっこしい觀念操作をするに十分な余裕も氣質もなかった。<sup>(2)</sup> 彼が認める、生存の矛盾という本質的な論理は別として、哲学者たちから容易に指摘され得る、論理の矛盾を、まるで意に介さないかのように、二義性の陰影を帯びる文学者の言葉をもつて、カミュは哲学を語った。彼に先行する、何らかの意味での超越に救済を求めた実存哲学者たちの思想を吟味する時にも、歴史の流れに反抗の渦を巻き起こした巨人たちの行為と思考に棹さす時にも、カミュは、対象に多角的な把握をとおし、ての査定をするという段取りを踏まない。生身の対象を、彼の鋭敏な倫理感覚という触媒にまず当て、一瞬、火花を散らせる。そして、対象とのあいだになお形而上的な共有地を見出すことができれば、カミュは、細心の注意と優しい敬意をこめて分析のメスをふるうが、一旦、自己の地上的なモラルに照らして対象の脆弱な点をさぐり当てると、寸鉄人をさすような短い言葉で対象のすべてを一挙に要約し、歴史の無関心の淵に沈めることによって、逆に自己の思想の孤立した位置を浮彫りにしてみせる。彼の哲学的エッセーの斬新さは、思想史に思わぬ角度から光を当てる、現象学的なほっこい発想にある。

ところで、カミュを政治行動に駆ったのは、最初から、政治理念の学習の結果ではなかった。貧困にどっぷり漬かつての生い立ちが、当然のように共産党に近づかせ、同じ風土に住むアラブ人たちの悲惨な情景が、克明な真情あふれるルポルタージュを執筆させる。しかし、党派の中枢からの指令が彼の判断にそぐわない時には、思い切り

よく身を引くし、アラブ人との連帯を訴えながらも、アルジェリアにおけるフランス人労働者階級の生活上の権利までを放棄しようとはしない。従って、強い好奇心の環視の中でなされた彼の政治的発言は、ルポルタージュ類の具体性を別とすれば、抽象的なモラルの、調子の高いものが多く、その根底には、彼とその家族に対する自衛の意識が屈折したかたちで残っている。この事実、純粹に政治理論として彼の発言から抽出した場合の、その稚拙な印象とあわせて、文学者としてのカミュ像をも卑小化し耶揄的のしかねない。ここに、文学者の政治アピールの長短の一例を見ることが出来る。

カミュの政治的発言には、文学に近い柔軟な浸透力をもって、政治の状況を大衆の心理や情念にまで届けゆさぶるものが確かにある。それは、切実な政治的願望を、現下の不安な鬱積した生活感情の水脈から迸らせ、遠いユーロピア的展望にまで高揚させる。その効果は、無視とからかいと敵意の目を向けられ憔悴しきったカミュが時として漏らした溜息ほどには、空しいものでない。しかし、普遍的な正義や真理という高潔な面貌を掲げることが、結果的に、特定の階層の利益をもたらしたり、意識的にそれを図っている場合があり得る。カミュの政治的提言は、まずアラブ民衆の生活環境の向上を推進するよう呼びかけている印象を与えるが、やがて両民族の対立の激化に伴って、それが、フランス系アルジェリア人の現状維持を前提とし、アラブ人にとって現在よりはましであるとしても、フランス人に比べて不平等な枠組を嵌めたままのものであることが明確になってくる。そして、両民族の平和と繁栄を念じていたカミュは、自分の政治的位置の選択が、双方の暴力の停止を呼びかけつつも、フランス人の現状維持のためにはアラブ人に対する無謀な弾圧を許容するよう変質してきたことに、さほど意識的であったと思えない。

今の時点においてカミュの政治的エッセーを読む者には、あくまでも文学者の意識と表現だけを触覚として、文

学とは異なる次元を不可避免的に含む政治の苛烈な情況に、あえて割り込んで行つた者の傷だらけの姿が見えてくる。カミュは、自分の生まれ落ちた位置における、貧者の肉体による文化と、地中海を挟んでのフランス文学の伝統と、異民族と混ざり合い矛盾に満ちた生活環境とを、自らの文学の源泉としてきた。だから、アルジェリアのフランス人が追放されることは、まだ若いカミュにとって、自己の文学の涸渇を怖れさせるものだったのかもしれない。しかし、自己の文学の擁護が、同時に他者の平和と自由を保証し拡張することになりうる限り矛盾はないが、それらの対立関係が露になりだすと、カミュの政治的発言には、自己の文学にたいする強い自信とともに、後ろめたい苦渋の色が隠せなくなってくる。この、文学者の社会的位置が帯びる二重性は、左翼系作家をも含めて今日の普遍的な問題であつて、軽々しく机上の批判に供する気にはなれない。ただ、カミュの文学にとって、動乱はすでに必要でなく遠ざけるべきものであつたのだから、その渦中に置かれ世論の俎上にのせられた彼の不運を歎くほかない。

それでは、彼の政治的エッセーは現在どのように読みとられるべきだろうか。政治論としての幼い無邪気な印象の陰に文学の潜在的なエゴイズムを見つけて告発することもできるだろうし、或は、これもまた文学の特質であるアナーキーな心情が政治ユートピアへと感動的に高まったものとみなすこともできるだろう。当代随一の誠実な文<sup>ぶん</sup>学者と目されていたカミュが、もはや白無垢の姿を保てないとしても、社会に押し潰されそうな個人の、跪くような叫び声を把えるのが文学者の仕事だとしたら、カミュの身の辺の瑣末な利害関係が消滅してしまった現在、彼のまぎれもなく誠実な声は辺を払って我々にまで届き、政治論としての輝きをさええ持ちだしていることも否めない。

しかし、カミュの政治的エッセーに対し、文学する者としてより実り豊かな理解に達するためには、それを彼の文学的表現と同時に、把握してゆく必要があるだろう。それは、無論、カミュの政治的エッセーに非文学的な解釈をほどこしながら、その確証として、彼の文学作品の政治的側面に触れるという遣り方ではない。また、逆に小説

や戯曲の仮構的な状況における登場人物たちのおもいや願いやふるまいを、カミュの政治的エッセーのエモーションナルな部分に結びつけるだけですまそうというのでもない。

同時的な把握——とは、或る時点にあって文学作品と政治的エッセーをものするカミュの想像圏をできるだけ構造的に把え、さらにその時間の幅を拡げてゆく視点のことである。カミュの政治的エッセーは、文学者として名をなしたあと、政治的に目覚めて始めたのでも、マスコミに強いられたり自分は政治もできると考えて始めたのでもない。カミュの政治行動は文学的エッセーと殆ど同時期に始まっているし、『異邦人』によって世界的名声をうる前に、彼は最初の政治的エッセーやルポルタージュを書いた。カミュにあっては文学と政治とがほぼ同時に発芽し、互いに絡まったり離れたりしながら展開して行った。従って、彼の政治的エッセーを同時期の文学的エッセーと関連させて把えるという発想は、カミュの想像圏の中心核をなすいくつかの要素を見出したという願望から出ている。そうすることによって、カミュの言語表現がさらに複層化したイメージをもつようになり、カミュ像の拡大と深化がなされればよいと思う。<sup>(3)</sup>その一つのささやかな試みとして、筆者は一九三九年に着目し、「カビリアの悲惨」と「ミノトル或はオランの憩い」とを取り上げる。

注 (1) “Chroniques Algériennes (1939~1958)” 一九五八年に自ら序文をつけ、“Actuelles III” として刊行。およそ

二十年にわたる七つの時事論より成る。以下 Albert Camus: Essais (Gallimard, 1965) より引用する。‘Misère de la Kabylie’ (1939) はその冒頭にあるルポルタージュ。

(2) A. Camus: Carnets, mai 1935–février 1942 (Gallimard, 1962), p. 23. 参照。

「人は、イメージによってしか思考しない。もし君が哲学者になりたいのなら、小説を書きたまえ。」

## (3) 'Minotaure ou la halte d'Oran', 1939

一九三九年から一九五三年までのエッセー八編を収めた『夏』“L'Été” (Gallimard 1954) における最初のもの。  
以下 *Essais, op. cit.* より、引用する。

## 一、「カビリアの悲惨」における〈自然〉

「アルジェ・レピュブリカン」は、パスカル・ピアを中心一九三八年十月六日、発行されたアルジェ唯一の日刊紙で、その理事会々員に数名のアラブ人がいたことから分かるように、原地民の諸権利回復と、フランス本土との関係改善をスローガンとした、急進的な新聞であった。特に、その雑報の地方通信欄では、フランス人下層階級や原地民たちの細かな日常問題がとりあげられていた。カミュ（当時、二十五才）は、最初から編集スタッフとしてこれに参画し、社説や文芸時評をはじめ、有名な裁判事件のいくつかを担当し、ジャーナリストとして華々しいデビューをした。<sup>(1)</sup> 「カビリアの悲惨」は、その地方通信欄に一九三九年六月五日から十五日まで十一回にわたって連載された。

このルポルタージュは、その年カビリア地方を襲った飢饉の経済的原因と、その悲惨な結果の報告から始めて、原地民の所得と教育の問題にまで調査の手を延ばし、さらに、政治的、経済的な解決策を具体的に示唆したものである。彼は、飢饉の原因を、穀物生産量の少なさ（消費量の $\frac{1}{8}$ ）、人口過剰、本土への移民の減少などにもとめる。それらの記事はカミュの实地踏査した多数の地域名と細かな数字の列挙によって説得力をもっている。また、アザミの茎で餓えをしのいだり三日も絶食したりする家族や、野良犬と争ってゴミ箱を漁る少年などの姿が、随所にちりばめられている。その上、飢饉にあえぐ人々には失業や就労時間の延長や職場の衛生管理の悪化などの厳しい条

件が負いかぶさってくることなど。そして、貧民救済を名分として実際には選挙運動と結びついた慈善事業（穀物の供与）の弊害について、カミュは執拗に食いさがる。さらに、教育問題に関しては、女子教育の遅れや学校数の不足による受益者の少なさを記録しているが、カミュは、観光客や視察団を目当てに辺鄙な砂漠に建てられた、場ちがいに豪華な校舎が、殆ど活用されていないことを、特に指摘する。

カミュがさしあたりアルジェリア経済の改善策として示しているものは、むしろフランス本土の側からアルジェリア生産品の売上げ価格の安定をはかり、農業移住の手続きの簡素化と促進を積極的に行うことなどであった。また、長期的展望として、アルジェリア経済は果樹栽培を主体とする他ないから、それまでの主要産物であるイチジクとオリーブの品種改良に加え、桜桃とイナゴマメの試作を勧めている。いずれの提案もきわめて綿密なデータに基づく。

政治上の機構改善として、カミュは、ウマルス（カビリアの一地方）において成功している天幕村連合（*douar-commune*）<sup>(2)</sup>の方式を紹介している。これは、それまで互いに連絡もなく散在していた天幕村をいくつか行政的に統合し、これに大幅な自治権を与えるとともに、中央との関係を密にするというものである。カミュがこの方式を賛美しているのは、ウマルスの頭領であるハジェレスの哲人政治家らしい風貌に接したためであるようだ。この新しい機構のもとで選挙と行政の腐敗を一掃することができるとカミュは考えた。

このようにカミュは、政府筋がアルジェリアへの経済援助と行政改善と技術指導にもっと計画的に当たれば、カビリアを初めとする原地民たちの悲惨は解消できると思っていた。精力的な実地踏査による裸眼の観察の積み重ねと、正確な資料の収集に、緻密な検討を加えて、現実の体制の枠内での、早急な再建を図ろうとした。とにかくカミュの目の前にフランス人たちの知らないカビリアの悲惨があった。情報提供者としての冷静な調子を保ちながら、

火急の救済を必要とする現実に寄せる素直なおもいの読み取れる、この優れたルポルタージュに、政治理念の面から抽象的な批判をほどこすことは避けるべきだろう。

しかし、異論の余地のない現実策を訴える時にも紛れようもなく顕われる（あるいは逆に顕われない）或る視点の特質を吟味することは、また別の問題である。カミュはフランスの植民地主義そのものを悪とみなす意識をもたなかった。<sup>(3)</sup> 植民者を一握りの富裕階級と大多数の下層階級に分け、カミュは、後者とアラブ原住民とを程度の差こそあれ貧窮のもとに同一視していた。はつきりと下層階級の出身者であるカミュは、しかしながら、富裕階級を敵とか征服者とみなす見解に組さなかった。「カビリアの悲惨」においても植民者富裕階級の権利に対してはかなり遠慮がちである。もしフランス植民者が自ら望むなら、二十万ヘクタールの土地をアラブ農耕者に分配することができる、軽く言及しながらも、植民者全体の犠牲はあくまで拒否している。だから、いわゆるピエ・ノワール<sup>(4)</sup> (Pied-Noir) の有利な移住についての考慮も怠らなかった。カミュが「カビリアの悲惨」で示した訴えの意図は、アラブ原地民と植民者下層階級が同化し調和を見出せるために、まず原地民の窮乏を斥けることにあった。それは、「アルジェ・レピュブリカン」の方針に全く適ったものである。

しかし、カビリアの地に、真に民主的な原理に基いた小連合共和国 (une petite république fédérative) が実現し、ヨーロッパとアラブを隔てる障壁がなくなり、同じ学校のベンチに双方の子供たちが互いを理解するために腰を下ろす日がやがて来るという夢想には、カミュ独自の願いがこめられていたと考えられる。その意味において、「カビリアの悲惨」執筆の動機は、政治問題よりもアルジェリアという不毛の地における人間の生き方の問題にまで根を下ろしていたと言えるだろう。<sup>(5)</sup>

確かにこのルポルタージュは、創刊当初から「人民戦線の新聞」を標榜していた「アルジュ・レピュブリカン」



の政治路線と矛盾するものではなかった。その二年前にカミュは、人民戦線政府がフランス―アルジェリア同化政策をめざす「ブルム・ヴィオレット計画」<sup>(6)</sup>のマニフェストに、アルジェリアの知識人たちとともに署名していることから、彼の政治的方針は明確であった。そして、このマニフェストの推進母体であった「文化の家」において、同じ年になされた演説の草稿を読むと、カミュに「カビリアの悲惨」を執筆させるに至る、より広い構想をほぼ推察することができる。

カミュは、「土着の文化、新しい地中海文化」<sup>(7)</sup>において、西洋と東洋の合流点としての地中海には、その沿岸の諸国民のあいだに、共通した一つの生きる様式があると述べている。人間の抱懷したあらゆる原理や思想が、地中海の自然と映像の中に解消し同化されてしまう。地中海人の期待する文化とは、その自然を前にした人間のなかに生きるような文化である。そして、地中海文化にふさわしい地中海政治というものがあってもいい。カミュはその時の聴衆の関心に合わせて、知識人の役割は、歴史を変えることではなく歴史を変える人間に働きかけることだと言う。

この演説草稿から、「カビリアの悲惨」に顕われたカミュの政治的意識の源泉を汲み取ると、地中海政治とは、さまざまな原理や思想のもとに人々や国民を集結するよう図るのではなく、地中海の自然とその映像を媒体として、人々を平等に生かす政治ということになる。政治を、人や階級や国家のあいだの、或はそれらを支える思想のあいだの、対立関係において把える観点からすれば、カミュの称える地中海政治は、まさしく政治観の欠落した、文化論の類にみえるかもしれない。しかし、文学者らしく映像と特殊な瞬間の情念を因<sup>もと</sup>に構成されたような政治論でも、やはり現実の政治に係わってくることがある。

カミュが、地中海政治という発想をモチーフとして、「カビリアの悲惨」を執筆した、――その痕跡は文中の随所に

かいま見ることが出来る。カビリアを实地踏査するあいだ、燦さんと午前の陽光がふり注ぐ小さな田舎町とか、歩き疲れた一日の終り、山々の壁に日陰の濃くなり始める頃とかに、カミュは美しい自然に見とれ、人間の絆というものを、はっきりと理解することのできる瞬間を、いくつか体験した。

Et à cette heure où l'ombre qui descend des montagnes sur cette terre splendide apporte une détente au cœur de l'homme le plus endurci, je savais pourtant qu'il n'y avait pas de paix pour ceux qui, de l'autre côté de la vallée, se réunissaient autour d'une galette de mauvaise orge. Je savais aussi qu'il y aurait eu de la douceur à s'abandonner à ce soir si surprenant et si grandiose, mais que cette misère dont les feux<sup>(8)</sup> rougeoyaient en face de nous mettait comme un interdit sur la beauté du monde. (Misère de la Kabylie)

この見事な土地に山山から降りてくる日陰が、どんなに無情な人間のこころにも或る和らぎをもたらすようなこの時刻に、谷間の向こうで、まずい大麦のバンケーキ一つの周りに集まっている人々にとっては、平和などないのだということを、私は知っていた。また、この素晴らしい雄壮な夕暮に身を委ねることができたならさぞ快いだろうに、私たちの前方に赤くともる燈火のしめす悲惨さが、世界の美に停止を命じているようなのを、私は知っていた。「カビリアの悲惨」

.... de ces longues journées empoisonnées de spectacles odieux, au milieu d'une nature sans pareille, ce ne sont pas seulement les heures désespérantes qui me reviennent, mais aussi certains soirs où il me<sup>(9)</sup> semblait que je comprenais profondément ce pays et son peuple. (Misère de la Kabylie)

比類のない自然の中での、数かずの醜い情景で毒された、これらの長い日々から、私に思い出されるのは、その絶望的な時間ばかりではなく、自分が深くこの邦とその民衆とを理解しているように思えた、いくつもの夕暮であつた。（「カビリアの悲惨」）

原地民たちの酸鼻をきわめた情景と目覚めるばかりの自然との間に分裂された瞬間は、カミュにとって絶望的なものであつたが、美と醜をともに含んだありのままの世界と人間を理解するに至つた――特に夕暮の一瞬は、英知の瞬間と言つてもよかつた。他者たちとの一致の意識を持つことのできるその時に、しかもなお、カミュには或る差異感が強烈に蘇つてきた。彼は、夕暮の世界の美しさを前にして、山の向こうに住むはずの、平和をなくした者たちの悲惨な生活へのおもいだけが、彼を人々から引き離し同時に結びつけるものだという意識をもつた。ほんの僅かな生活の資を補給するだけで、彼らは自分自身と調和のとれた生を営むことができるだろう。カミュは彼らが本来の地中海人に戻るのに手を借そうとして、ルポルタージュを書いた。

カミュにとって生活上の窮乏は、人間を世界の美と対面させる妨げとなるために、悪であつた。そして世界の美と対面するのに、物質的富裕は必要でなく、むしろ障害となつた。カミュには貧困 (*pauvreté*) と不安の感覚に浸っていることが、生きるための不可欠な条件であつたとさえ言える。だから、原地民たちの物質的な悲惨 (*misère*) を救済するためには、ほんの僅かなものでよいし、彼らが植民者下層階級とほぼ同等の生活レベルに達しさえすれば、もう自分にアッピールすべきことはないとかミュは考えていたと思う。カミュの政治的主張は、そのほんの僅かな物質と人権の回復のためにだけ発せられたものであり、それ以上の政治論に発展する必要はなかつたのだ。（後年カミュは政治独自の理論と現実とに直面せざるをえなくなるが。）

むしろ、カミュの「カビリアの悲惨」は、人間の生活にとって物質的な向上が、何のために必要なのかを教えてくれる。物質と人権の平等は、カミュの政治的発言の前提条件でしかなかった。そして、カミュは、彼に親しい貧困の位置にあって、ひとり世界の美に触れていた。

それなら、他者の悲惨はカミュにとってどれほどの意味をもっていたのだろうか。他者の悲惨は、カミュが自ら見出した至高の瞬間において、完全に払拭されていたのか。苦さと歓喜の沸騰する瞬間——そこに作用していたと思われる、カミュの「人間の悲惨」についての意識に、それは質的な変貌を遂げていないだろうか。「カビリアの悲惨」と同じく、一九三九年に書かれた文学的エッセー「ミノトオル」をとおして、カミュの世界の美を検討してみる必要があると思う。

注(1)カミュの伝記は主に次の著作を参照した。

Roger Quilhot: *La mer et les prisons* (Gallimard, 1970) 年譜。

Philip Thody: *Albert Camus, 1913-60* (Hamish Hamilton, 1961)

Camus (Hachette, 1964) (Collection Génies et Réalités)

高畠正明『若き日のカミュ』(サンリオ、一九七一年)

(2) *Misère de la Kabylie* 中の *L'avenir politique* (Essais, op. cit., pp. 924-928)

(3) それには、カミュの党活動の挫折が、強く作用していると思う。

(4) 祖先はヨーロッパ出身であるが、自分はアルジェリアで生まれたアルジェリア住民のこと。カミュは、アルザス人の血をひいた父とマジョルカ島(スペイン)人を祖先にもつ母との間に、北アフリカ、コンスタンテ

イーヌ県、モンドヴィで生まれたので、典型的なピエ・ノワールである。

(5) Essais, op. cit., p. 937 参照。

「いかなる場合でも、進歩は、政治的問題 (un problème politique) が人間的問題 (un problème humain) によって置き換えられるたびに、実現される。」

(6) Le projet Blum-Violette, 1936

アルジェリア原住民のすべてに市民権を与え、且つ、コーランの法規の維持を許可するという法案。アルジェリア植民者富裕階級の反対が強く、国会で否決された。

(7) La culture indigène. La nouvelle culture méditerranéenne (Essais, op. cit., p. 1321)

(8) ibid., p. 909

(9) ibid., p. 937

## 二、カミュの美意識における〈悲惨〉

「ミノトオル」には、アラブ原住民の悲惨についてはもとより、それをほめかすような記述さえ、どこにも見当らない。その主要な個所には、地中海人にとっての自然の重みが、ずっしりと居据わっている。灼熱の自然の中に位置する一人の人間についての瞑想は、カミュの生涯の中心テーマであった。<sup>(1)</sup> 別言すれば、一つの生存にとっての砂漠の意味を問い質すことが、彼の変らぬ関心事であった。この種の省察に分け入ると、カミュの顔はいつしか砂漠の聖者の面影をもち始める。彼が見とれ目を凝らす景色とは、無垢の土地を、海の見える丘へと登ってゆく、巡礼たちの列である。そこでは、人間たちの存在は、無垢と美の大地を際立たせて通過する、動く点景にすぎない。

燦々と光線のふりそぐ砂漠と海の間にあつて、カミュの強靱な視線は、一瞬、光と影の均合いがとれた美の世界を、結実させ定着させるかにみえる。カミュは、自然が陰影と色彩の完璧な対位法をかいま見せる、特定の刻限と高度との穴場を、知り尽しているようだ。彼の自然描写には、狙いをつけて刻々と均衡の世界に近づいてゆく、息づかいが感じられる。

しかし、アフリカの自然は、均合いのとれた観照の額縁に納めてしまうには、あまりにも強烈である。世界の美は、カミュの大きく見開かれ注意の張り詰めた視界を、粉微塵に砕き、彼の脳裏に自らを焼き付けることで成り立った。そして、アフリカの苛烈な光線は、ありきたりの人間性のことごとくを、手もなく笑殺してしまう。その自然と対面しては、人間としての機能が、――精神も心理もポエジーも――瞬く間に蒸発し姿を消す。カミュはまず人間の不在をもとめて苛酷な自然に身を委ねる。彼にとって、人間の、歴史からの超克は、非情なアフリカの自然に頼るより他になかった。そこは人間としての欲望や意志や苦悩がすべて溶解してしまう増埒ふつのようであつた。カミュは、太陽が灼く砂漠の平地に、ひとりの人間として自然と対決していた。それは、カミュだけに特権的な位置ではなく、地中海人のすべてに適用しうるものであるが、各人は自分の存在の穴からのみ、光りかがやく自然と対面しなければならぬ。

カミュに個有の存在の劇ドラマが、こうして、灼熱の大地の上でとり行われていた。美の均衡の瞬間へと昇り詰めるには、苦しい持続があり、彼のうちでは、感情も欲望も魂も、過度の暑熱に襲われて、溶け出し、迸り、悶もぎ合っていた。自分の内に叫びを抑え込み、諾ウエと否ナの葛藤が、眩くらくほどの白熱と化してゆく。生きることの苦さと悦びとが、緋ひい混ぜになって、沸騰の状態をかもし出していた。彼は、同じく砂漠の中で瞑想に耽る釈迦牟尼に想いを馳せるが、カミュの自然との対決は、莫大なエネルギーを要する、ヨーロッパ的なニヒリズムに近いように思われる。

Pensons à Çakia-Mouni au désert. Il y demeura de longues années, accroupi, immobile et les yeux aux ciels. Les dieux eux-mêmes enviaient cette sagesse et ce destin de pierre. Dans ses mains tendues et raidies, les hirondelles avaient fait leur nid. Mais, un jour, elles s'envolèrent à l'appel de terres lointaines. Et celui qui avait tué en lui désir et volonté, gloire et douleur, se mit à pleurer. Il arrive ainsi que des fleurs poussent sur le rocher. (Le Minotaure)<sup>(2)</sup>

砂漠における釈迦牟尼のことを考えよう。彼は長い歲月そこに留まった。踞り、動かず、目を空に向けて。神々さえ彼の、この叡智と石の宿命とを羨んでいた。差し出された堅い両手の中に、燕たちが巢を営んでいた。しかし、或る日、燕たちは、遠い大地の呼びかけに、飛んで行ってしまった。すると、それまで自分の内に、欲望と意志、榮譽と苦悩を押し殺していた者が、泣き出した。こうして、花花が岩の上に生え出るに至る。〔ミノトオル〕

アフリカの自然は、それと対決の姿勢をとる人間から、存在のすべてを根こそぎ抜き取り、拉致してしまうかに見える。自然の強い力に打ちひしがれたと言うより、人間の中味がすっぱり吸引されたと言う方が適切である。徐々に美の完璧な瞬間に迫り上がりつつある自然の中では、自らに適わしい位置を占めた岩石や糸杉などの、自然の事物の側にこそ、すべてを律する道理が具わり、人間はただ息を潜めて刮目している他にはない。沈黙するカミュの位置から、白い光を放つ明晰な情熱が、ゆらゆらと陽炎のようにもえ立つ。陽光に暖められた石の懐く平和を夢見ながら、彼は、叡智へ接近しそれと同化することに、あわや成功しそうになる。彼の辺には、人間の欲望の匂いの

去った、無垢の世界が実現するだろうか。カミュは、世界の美が顕われる瞬間に立ち合うには、人間の側の無垢な愛が――ほんとうは、それだけが必要だったのだと言うのを躊躇しない。<sup>(3)</sup>

しかし、世界の美に人が征服されそうな瞬間に、砂漠の中の葦笛と泉の音のように、悲しさと優しさの入り混った啜り泣きが聞こえてくる。人間の拉致されたからっぽの空間を、自然の秩序が怖れるかのように、詩と人間のところが、雪崩を打って帰還してくる。

「花花が岩の上に生え出る。」

非情のはずの岩の奥から、秘かな情熱を湛えた人々の顔が、微笑を含んで現われる。<sup>(4)</sup> 岩石の核に潜んだ種子が芽を出し、割れ目を探し、自らを押し上げるようにして花を開いた、――だから、その微笑は多くの傷を隠している。

カミュの待ち望んだ美の世界は、確かにこの世の現在のものではあったが、苦い味のする祖国であった。しかも彼は束の間のうちにそこから転落し、再び人間の欲望の鎖に繋がれてしまうかもしれない。アフリカの無垢な自然は、カミュが人間の悲惨を伴いながら、くりかえし身を委ねにくる、聖なる所であった。彼がそこに見出した美の世界は、無垢の回復を願う想いに裏打ちされたものだった。

それなのに、彼のそれまでの生涯には、癒しがたい悲惨の数々の記憶が纏い付き、現に克服すべき病があった。父親の死、窮乏生活、肺結核、最初の結婚の失敗、哲学研究の止むをえぬ放棄、共産党との訣別、閉ざされた就職の道、拒否された従軍の希望。この多彩な挫折歴と対照して、彼の華々しい活動歴をも挙げなければならない。文学士号、〈文化の家〉での活躍、アルジェ大学サッカー部のゴールキーパー（二年間）、演劇集団〈労働座〉や〈仲間座〉の創設、学位論文、ラジオ・アルジェの専属俳優、各種のアルバイト、（気象観測所、アルジェ県庁、貿易会社、自動車部品のセールス、家庭教師など）オーストリア・プラハ・イタリア旅行、〈アルジェ・レピュブリカン〉



編集委員。創作の面では、「アスチュリーの反乱」(共作)、「幸福な死」、シャルロ社から刊行された『裏と表』と『結婚』の二冊、「カリギュラ」と「ミノトル」の完結、『侮蔑の時代』(A・マルロオ)の脚色、そして、すでに「異邦人」にとりかかっている。二つの劇団は、カミュが指導者となり、主として翻案劇を十ほど上演し、彼は、演出、舞台装置、音響効果、俳優など、あらゆる分野を手がけた。<sup>(5)</sup>

二十六年の生涯にとっては、カミュの履歴は、あり余る不運と桁外れの意欲的な活動とに充ち満ちていると言わなければならない。経済的貧困や病弱などの不遇はいたし方ないとしても、早婚(二十一才)や党活動などの蹉跌は、自ら選択した行為の結果にすぎないのだから、彼の生きた膨大な量の中に加算され得よう。いま、苦衷に満ちた熱狂的な刻苦勉強型の人間や、豊かな天賦の才に恵まれた人間を、問題にしているのではない。カミュの不如意と挫折の跡を辿り、同時に、彼の体を張ったぎりぎりの活躍ぶりをみると、彼の内の、諾と否との白熱化した葛藤が見えてくる。そして、カミュの美意識を構成する基本のモメントとして、人間の悲惨についての意識が必要不可欠だったのではないか。

右に挙げたカミュの活動歴の中から、一つの旅行を例にとってみよう。その旅行は、カミュの自伝的要素が強いと言われている、『裏と表』の「魂の中の死」における「自然」に結実された。(この文学的エッセーは、カミュの「手帖」を参照しても分かるように、一九三六年夏のプラハ、イタリ旅行から素材を取っている。語り手の「私」は、金が余りなく安ホテルに投宿し、多量のウイキョウで胸がむかつくような食事を取りながら、毎日、ユダヤ人墓地などを彷徨<sup>さまよ</sup>っている。その間、ホテルの一室で老いた旅人が人知れず息を引き取っていた。東欧の町は「私」に、酢づけキュウリの匂いの、重苦しい記憶しか残さなかった。「私」はプラハを去り、イタリアのヴェイセンスの丘で、「樹々と太陽と微笑に満ち溢れた平原」を前にして、六日間を過ごす。ここには、カミュの美意識の展開の雛

形がある。窮乏や別離や死などの悲惨に身を潜め、それらを極めたあとで、急き立てられるように、自然の美の方へと遁走してゆく。この旅行は、カミュ自身の表現によれば、「自己からの逃走」であった。<sup>(6)</sup>

ところでカミュは、この時の旅行を素因の一つとして、処女小説『幸福な死』をも書いたが、プラハの舞台はそのままであるのに、イタリアの丘が「世界を臨む家」のあるアルジェの丘に変わっている。そして、この小説に出てくる、プラハの貧民街でのエピソードは、実際には、カミュがアルジェで体験したものだといふ。<sup>(7)</sup> そうすると、カミュの意識においては、イタリアやスペインは地中海沿岸に所属するという意味で、アルジェリアの風土と同一視され、プラハの貧民街はアルジェのそれと一体化していたといふことができる。つまり、カミュの意識にあつては、人間の悲惨の体験も無垢の世界との対面も、同じくアルジェリアの風土の中でなされ、カミュの体験も想像も、常にそこに収斂されて行つた。そして、アルジェの貧民街のイマージュは、奨学生カミュと家政婦である母親たちの住むベルクルールの白人労働者街から、その裏手のアラブ原住民の区劃にも及んだ。さらに、映像の涉獵者であるカミュの足は、飢饉に悩むカビリアの地へ赴いた。生存の本質をなす悲惨についての意識は、こうして、カミュの中で育まれるべきものとなった。

カミュは、その意識された悲惨の現実を懷いて、アフリカの無垢の大地に対面していた。カミュの実現したかった美の世界を、「貧困と太陽」という均衡のとれた構図によって説明し尽すことはできない。カミュの病氣と挫折と窮乏の体験による苦悩は、別の秘かな情熱に移行し、形而上的な世界に品化させなければ、彼の生存を、悲惨の淵に突き落としてしまっただろう。光り輝く砂漠と黒ぐろと立つ糸杉は、カミュの苦悩をすっかり消去し、無垢と美の世界へ彼を同化させてくれるように見えたが、一瞬の幻覚だったのかもしれない。彼には美に身を捧げようとする者の苦い後味が残り、欲望への転落が口を開いていた。カミュの自然への挺身は愛の原形を思わせる。そして、自

然への愛は、彼の人間と芸術とに対する情熱の基本原理をなしていた。自然との対面は、全身の感覚をとおして、こころの脱衣がより素直になされう。彼は個人、の肉体による文化を形成することに、すべての情熱を賭けた。スポーツも演劇もドンファニズムも、そして文学さえも、カミュの、肉体による文化活動の一環をなしていた。<sup>(8)</sup>それは、文化的遺産をもたないアルジェリア人にとって、唯一の文化の可能性を示すことであり、カミュの使命はそこにあった。

「カビリアの悲惨」は、貧民の窮状を報告し救済を訴えることを目的としていたが、随所に現われる付録のような部分に、アルジェリアの風土と対面するカミュの理念が息づいている。

注(1)地中海人の瞑想については、J・グルニエのカミュに及ぼした影響が、よく問題になる。グルニエの『地中海の靈感』(Jean Grenier: *Inspirations méditerranéennes*) 中、アルジェリアに関するエッセーは、既に一九三七年に発表されていた。そこには「アルジェのカスバ」という項目もあるが、カミュの「カビリアの悲惨」の直接の関係は見当らない。むしろ、一九三九年版の序文を読むと、次の二点においてカミュとの共通性を感じる。

(一)地中海の寄与するものを、幸福の概念と結びつけていること。

(二)地中海は、絶対(Absolu)への崇拜と行動(Action)への崇拜から等距離にある、或る形而上学(un métaphysique)を鼓吹する、としていること。

(2) Le Minotaure 中の 'La Pierre d'Ariane' (Essais, op. cit., p. 830)

(3) Carnets, op. cit., p. 73 参照。

(4) 人間的なものの還帰というモメントは、『異邦人』のムルソーが、死を間近にした獄舎で、自分を幸福と感じ、「世界の優しい無関心」 (*la tendre indifférence du monde*) に気付くモメントへと、深められてゆく、と思う。

(5) 演劇の分野でのカミュの活動と作品に関しては、Morvan Lebesque: *La passion pour la scène* (Camus, op. cit. 所収) が、最も参考になった。

(6) Carnets, op. cit., p. 54

(7) “*La mort heureuse*” (Gallimard, 1971), p. 223 (Notes et variantes)

(8) Carnets, op. cit., p. 25

「泳がねばならぬのと同様に、私は、書かねばならぬ。なぜなら、私の体がそれを要求しているから。」